



## 6 香川勝廣《花唐草透彫水晶入短刀拵》一腰

明治三十七年（一九〇四） 金／透彫 総長・四二・二

前掲No.5の御剣刀装に加納夏雄の金具彫刻補助として参加していた香川勝廣が主任となり、同じく明治天皇の御下命を受けて短刀の拵を製作した。No.5が毛抜形目貫のつく沃懸地衛府太刀拵という近世以来の伝統的な刀装だったのに対し、香川の製作した短刀拵は正倉院宝物の刀子の拵など、さらに古い刀装様式を参照したものであった。付属の文書によれば、「図案はわが国伝来の諸名作を斟酌し」とあり、明治二十七年に図案が完成した。しかし、香川が同時に携わっていた御剣刀装の進行状況の遅れなど、製作には予想外の日時を費やしたため、本作の完成は同三十七年十二月、実質十年の歳月を要した。本拵の製作に当たったのは、金具彫刻を香川勝廣と川崎則長、金具下地を田村宗吉、鞘を小堀正治が担当した。鞘を覆う緻密な花唐草の透彫には、No.5と同じく御料鉾山から採取された純金が使用され、甲州産の水晶が花に嵌入されている。柄には古香木を用いるなど、山形の帯執金具がつく透彫の鞘と合わせ、古代の刀装様式を意識したものである。精緻な文様をシャープに表すことが得意であった香川の本質を十二分に発揮した代表作である。なお、刀身は明治二十年に徳川家達より皇室へ献上された《宗瑞正宗》（鎌倉時代、十四世紀）である。

香川勝廣（一八五三～一九一七）は江戸で生まれ、十二才で能面師・有吉吉長に木彫を学び、その後彫金を野村勝守、絵画を柴田是真に学んだ。彫金はのちに加納夏雄に師事し、前掲No.5の御剣刀装の製作に際しては加納をよく補佐した。明治三十一年（一八九八）、加納の後任で東京美術学校教授となり、同三十九年に帝室技芸員に任命された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections